



生の時間と歴史の時間 : 後期ジンメルにおける時間論について

大窪, 彬夫

(Citation)

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:57-67

(Issue Date)

2022-06-30

(Resource Type)

research report

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009411>



第5章 生の時間と歴史の時間 後期ジンメルにおける時間論について

大窪彬夫

第1節 問題の所在

本稿の課題は、後期ジンメルの思索の柱をなす時間論の構成契機である「生における時間」「歴史における時間」「歴史学における時間」という三つの「時間」の固有の性格を解明することである。後期ジンメルには生、歴史、歴史学という「時間」を共通に本質とする三つの位相への思索が存在しており¹⁾、各位相の時間が統合的にいわば「時間論」として把握されることが、そしてこの把握のために各時間に固有の性格が解明されていることが、後期ジンメルの理解の鍵となるのである。本課題に関わる先行研究として、廳 [1995; 2005] による後期の歴史論における生と歴史認識の連関の考察やジャルバート [Jalbert 2003] によるハイデガーを介したジンメルの生、時間、歴史の関係の考察がある。しかし両研究でも各位相の時間に固有の性格の解明が十分とは言い難く、とりわけ歴史における時間が見失われることで生と歴史学との関係が不明瞭になっている。そこで本稿は生、歴史、歴史学の各位相の時間を一つの基本構造の下で理解することで、各時間の固有の性格を明らかにする。

第2節 ジンメルの時間論の基本構造

ジンメルの時間論の考察のためには、まず彼の時間論がカントとベルクソンの時間論を批判的に継承した点が明確にされねばならない。なぜならこれを通じてジンメル自身の時間論の要点が、そしてジンメルの時間論の基本構造が解明されるからである。

(1) 自己認識の形式としての時間 カントの時間論の継承

ジンメルは『カント』²⁾ [Simmel (1904)1918=1976] において、カントの時間が「自己認識」に関わる「表象界の全体の統一化」を行う形式である点に着目する。心は自分自身を、それ自体においてあるようではなく、それが自己に現象するように認識する。心が自分自身を認識する諸表象は、それが認識である限りは、受容する意識の構造によって統一される。この直接性を越えた統一を与える形式こそが「時間」である。我々自身についての諸表象が一つの系列をなし、それらがこの前後関係を媒介にして、中断することのない「時間形式」の中で経過してゆく心の「歴史」[Simmel (1904)1918: 93=1976: 111] になるという意識を通して、自分自身を経験するのであり、換言すれば主観的状态を越え出る「自我」が認識されるのである。以上、ジンメルはカントの時間を、心の諸表象が統一され、またこれによって心自身を「認識」することを可能にする形式と解する。

ジンメルは以上のカントの時間を、歴史学における時間に関する説明において受容している。ジンメルは彼の歴史認識論において、歴史をアプリオリなカテゴリーにより秩序づけ

られた諸々の材料から形成される歴史像であるとする。その際、諸内容を「体系内の特定の位置に固定」[Simmel 1916a: 289=1976: 228] し、順序、持続へともたらず「時間」を、歴史性の形式的規定に対する決定的規定とみなすのである。しかし他方で、生の過程を基礎づけるには、カントの時間は「機械論的」[Simmel 1918b: 221=1977: 22] であるため、ジンメルは生の過程を可能にする時間をカントの時間とは別のところに求めるのである。

(2) 生の時間 ベルクソンの時間論の受容

ジンメルは「アンリ・ベルクソン」[Simmel 1914=1955] の中で、ベルクソンの時間論を論じている³⁾。ベルクソンの時間論は、未来を先行する状態から全て計算できるという科学の機械論的な時間理解を批判し、生の本質形式としての時間を提示する。この生を形成する時間は次の特徴を持つ。第一に「経過」という性格である。時間は不断の流れで満たされ、経過する時間を切り縮めることは決してできない。第二に「不可逆」という性格である。時間は連続的前進をその本質とするがゆえに、あらゆる瞬間は一つの新しいものである。それゆえに生の発展は、あらゆる瞬間に創造的である。第三に「歴史」を持つという性格である。現在は、過去から切り離されてあるのではなく、いずれも過去全体を前提としている。この過去は絶えず増大するがゆえに、生のいかなる瞬間も他の瞬間と等しくはありえない。以上の特徴を持つ時間が生の本質形式をなし、それゆえに生は「根源的・創造的な運動」[Simmel 1914: 58=1955: 162] なのである。

ここで示された時間の諸特徴は、各々①連続的性格、②創造的性格、③歴史的性格、と言い換えることができる。ジンメルはこの内、未来に関わる②創造的性格と過去に関わる③歴史的性格を自身の時間論へと取り入れる。彼にとってベルクソンの場合と同様に、生は実際に過去と未来なのである。他方でジンメルはベルクソンの時間論を全面的に受け入れたわけではないようである。両者の違いは、現在に関わる①連続的性格に対する考え方の違いに現れる。ベルクソンにおいて時間の連続的性格は「不断の流れ」と理解されていた。この点でジンメルはベルクソンと袂を分かち、ジンメルが焦点を当てるのは、生成の「絶対的流動性」ではなく、連続的な生の流動が「個」において堰き止められ、再び「個」が生流動になるという一連の働きである。彼はこのような「自分自身を越える」運動を生「自己超越」[Simmel 1918b: 217=1977:16] と呼び、生の根本事実とみなすのである。

(3) ジンメルの時間論の基本構造

カントとベルクソンの時間観を総合する形で、ジンメルは自身の時間論を構想する。一方で生の過程を可能にする形式としてのベルクソンの時間を受容する。生のあらゆる瞬間は創造的であると共に絶えず増大する過去であり、それゆえに生は根源的・創造的な運動なのである。しかし他方で生はこの運動それ自体を認識することで自己を知るという精神的な過程である。そこでジンメルは自己認識の形式としての時間をカントから継承する。生は、その時々個々の表象を一つの時間系列に秩序づけ、一瞬間から引き離し、これらの表象が

一つの全体としての「歴史」になるという意識を通して、自身を認識するのである。

以上からジンメルが時間論の基本構造を見出せる。第一に生の過程を総合するのは「自己超越」という根本事実であり、そこでジンメルはこの自己超越を可能にする「生における時間」を探求するのである。第二に生は、自身を単なる生成としてだけでなく、「歴史」的存在としても形成しているのであるから、「歴史としての時間」が探求される。だが生が歴史的なあり方をするといっても、生の実践の内において、生はこうしたあり方を十分に見渡して認識するわけではない。そこで第三に生が自身を「認識」する形式である「歴史学における時間」が探求されるのである⁴⁾。以上がジンメルが時間論の基本構造である。

第3節 生における時間

(1) 時間と運動

生の運動の意識形態としての時間

ジンメルは時間を運動との密接な関係において論じる。彼が想定する運動は、位置移動としての運動ではなく、ある種の「直観の質」として示される「生の運動」である。すなわち、通過した個々の位置から運動が合成されるのではなく、「持続としての運動」として個々の位置へと至らしめた活力的な統一体が直観されるのである。彼はこのような運動の資格証明が「時間概念」によって言い表しうるとする。「我々は運動の瞬間を過去の結果と未来の潜勢力として感じ、いわば内的な一点に集中された力が運動に転換する」[Simmel 1916b: 362=1977: 73]。つまり「生の運動」は、「過去」や「未来」と「瞬間」との独特の総合である「時間」を通じて「感じ」られるのである。

「生の運動」に対応するこの「時間」は、主体によって生きられた生を形成する「生における時間」である。ジンメルによれば、主体によって生きられた生は、「自分自身を時間的な広がりの中にある実在的なものと感じている」[Simmel 1918b: 218=1977: 18]。時間的な広がりの中で、現在は「過去の断片とより小さな未来の断片から組み立てられている」[Simmel 1918b: 218=1977: 19]。すなわち現在は一方で、「もろもろの瞬間に、我々は瞬間を越えて過去に入り込んで生きる」[Simmel 1918b: 219=1977: 20]。なぜなら現在の生は、概念、形象、記憶という形式の力を借りて、「かつて体験されたことにまで遡及している」[Simmel 1918b: 219=1977: 20]からである。他方で、我々の現在の意志、感情、思考は、「直接に未来に入り込んで生きる」[Simmel 1918b: 220=1977: 20]。つまり現在の意志は、現在と未来との対立のあちら側にじかに立つと共に、活動している意欲の瞬間において、この瞬間を越え出ている。以上、彼は「生の運動」に対応する「生における時間」を、現在が過去や未来へと入り込むことで、「瞬間」を自ら越える「時間的な広がり」ないし「独特の総合」の形式と考える。

「生の運動」と「生における時間」との本質的に共通する性格としての「自己超越」

ジンメルは「生における時間」を「生の運動」の直接的な「意識形態」と理解するが、彼

がこのように理解するのは、「生の運動」と「生における時間」が本質的に共通する性格を有しているからである。彼によれば、こうした共通性格は「自己超越 (Selbsttranszendenz)」という性格、すなわち「自分自身を越える (Hinausgreifen über sich selbst)」[Simmel 1916b: 385=1977: 100] という性格である。「自分自身を越える」というこの性格が実体に浸透することで、「生の運動」は引き起こされる。すなわち、生は自己を担う実体の超克を目指すことで、あらゆる瞬間に自分自身の超脱を欲し、自分自身を越えて作用を広げるのである⁵⁾。同様に「生における時間」は、「現在的なものとしての自分自身を越えること」[Simmel 1918b: 221=1977: 22] である。つまり、時間は個々の瞬間を越えることとして、本質的に「自己超越」という性格を持つのである。以上、「生の運動」と「生における時間」はいずれも、「自己超越」という共通性格を持つ。

このように生は「自己超越」という性格を備えるのだが、ジンメルによれば、時間的な自己超越とは、「過去や未来」と「現在」との対立が「乗り越えられる」ような「瞬間」が「感じられる」こと、すなわち「現在」が過去の「もうない」や未来の「まだない」との統一体としての「瞬間」において我々の意識に現れることを意味する。したがって「時間的な広がりの中にあると感じる」と我々が言っているのは、「過去は実際に現在に入り込んで現在に存在し、現在は実際に未来に立ち出でて現在に存在している」[Simmel 1918b: 222=1977: 23] と語ることでできるような直観的な状態において我々があるときなのである。

(2) 瞬間と境界

独特な総合としての「瞬間」

では「生における時間」が「自己超越」として特徴づけられるとすれば、過去と未来への自己超越を可能にする「瞬間」とは、どのようなものであるのか。ジンメルにとって「瞬間」は独特な総合、すなわち過去という「もうない」や未来という「まだない」と、現在という「ある」との独特な総合である。換言すると、「瞬間」は現在に属すると共に現在には属さないという論理的には矛盾したあり方をし、しかもこのような瞬間の矛盾的なあり方においてこそ時間は実在的である。それゆえ「瞬間」は時間の最も本質的な契機なのである。

以上の時間の本質的契機であり論理的には規定しえない独特の総合である「瞬間」を、ジンメルは運動における「境界 (Grenze)」[Simmel 1918b: 213=1977: 10] と類比的に解釈する。彼は「瞬間」を過去・現在・未来という時間の三つの構成要素の中で現在にのみ属する「点」としてではなく、「未来にも現在にも属する」あるいは「過去にも現在にも属する」ような「境界」として解釈するのである。「瞬間」はこのような意味で時間的な「境界」であり、また「境界」であるからこそ、現在は機械的な存在の現在のように点的な現在ではないのである。そしてこの「瞬間」が備える「境界」としての性格ゆえに、時間は「現在的なものとして自分自身を越えていくこと」として、要するに「その実在性を現在という時機に制限せず、したがって過去と未来とを非実在的なものの内に押しやることもしない現存様式 (Existenzart)」[Simmel 1918b: 221=1977: 22-23] として把握されるのである。

「瞬間」の本質としての「境界」 境界を持たない境界存在

では「瞬間」の矛盾的性格は何に基づくのか。「瞬間」もまた生の運動と対応関係にある。ジンメルによれば、生の運動は「境界を持たない境界存在 (das Grenzwesen, das keine Grenz hat)」[Simmel 1918b: 218=1977: 18] という矛盾的なあり方をする。生は「境界」を自ら設け、そのことで「境界」を踏み越えるのである。この生の最も一般的な作用である境界の超越を、彼は四つの作用の総合と捉える。①我々は至る所に境界を持つ。このことで我々は境界でもある。②我々は絶えず境界づけられていると同時に、我々はこの境界を絶えず乗り越えていく。③我々は境界を境界としても知る。それゆえ境界に内側からも外側からも関わる。④我々は自分自身で境界を設けると共に、この境界を踏み越えてゆく。以上の境界を超越する動きにおいて、生は端的に生けるものとして姿を現す。

生における時間もまた「境界を持たない境界存在」というあり方をしている。生は各瞬間において「過去の一切の帰結」と「将来の一切の活力」[Simmel 1918b: 392=1977: 259] を自分の内に持つ全体としてあるのだが、現在の「瞬間」においてしか姿を現わさない。しかしそれゆえに、この「瞬間」において過去は現在へと入り込んで存在し、現在は未来へと立ち出でて存在する。換言すれば、生における時間は、いわば「境界を持たない境界存在」として、内部から「瞬間」へと高まり、そして「瞬間」を乗り越えることで、過去、現在、未来の矛盾的综合を担うのである。したがって「瞬間」の矛盾的性格は、時間の「境界を持たない境界存在」というあり方に起因するのである。

以上ジンメルの記述に基づき、生における時間の特徴を解明した。生における時間は、生の運動の意識形態として、「境界を持たない境界存在」に担われる「自己超越」としての生の運動と本質的に共通する性格を有し、「過去」や「未来」と「現在」との境界としての「瞬間」へと高まると共に、「瞬間」において「現在」から「過去」や「未来」へと超越する独特の総合として捉えられるのである。

第4節 歴史における時間

(1) 「個」と「歴史」

ところで生が統一をなすためには、生における時間だけでは不十分である。なぜなら生における時間は、過去、現在、未来を統一する全体性を保証しないからである。この統一には、この運動の統一が意識される時間形式が必要である。このような時間形式が「歴史」である。ジンメルによれば、生は絶対的生成の瞬間であるだけでなく、「統一的なもの (Einheitliche)」[Simmel 1916b: 446=1977: 175] に即して実現される。これにより諸瞬間は「その前」「その後」に分類され、「発展諸瞬間」として秩序づけられる。そしてこの「統一的なもの」において、過去や未来と瞬間との内的緊張を孕みつつ、生は自身を「歴史」として意識するのである。彼はこの「歴史」を可能にする「統一的なもの」として、「個」を考察している。

ジンメルは生の運動を「生の自己超越」と呼ぶが、この運動の要は「個 (Individuum)」[Simmel 1918b: 222=1977: 23] である。なぜなら「世代の系列を貫く連続的な流れ」である

生は、自身を「個」として形成することで「境界」を設け、しかもこの境界としての「個」を乗り越えていくところにその運動の本質があるからである。したがって、生は自己超越の運動へと送り返されるのだから、個の存続のためには個を継続的に形成し維持するための契機が必要である。第一の契機は、生が自身を「全体」として形成することである。個は固有の「本質法則」[Simmel 1918b: 343=1977: 190]を持っており、これによりその都度の瞬間の生を次々と組み込むことで、統一的な「全体」を形成するのである。第二の契機は、生を内部から形成する「死」[Simmel 1918b: 298=1977: 127]である。この死は外部からやってきて突然生を断ち切るのではなく、「生の形成者」[Simmel 1918b: 306=1977: 139]として生に初めからしかも内側から生の各時機を形成する。そしてこの死が根本的になるのが、「個」なのである。なぜなら「類的なもの」は後裔へと継承されるがゆえに、不死だからである。「最も個性的な存在者は、最も根本的に生きるがゆえに、最も根本的に死ぬのである」[Simmel 1916b: 409=1977: 130]。換言すれば、死が直接的に生そのものの中に沈み入れられているほど、生はますます「個」として形成されるのである。

生の運動が「個」によって担われることで、生成の絶対性は拒否され、ここに生の諸瞬間は歴史的な「時間系列 (Zeitreihe)」[Simmel 1916b: 447=1977: 175]というあり方をすることになる。絶対的な生成はいかなる「統一的なもの」も与えず、「その前」や「その後」が刻みつけられることもない。絶対的生成は「非歴史的」なのである。これに対して、何らかの「統一的なもの」に即して実現されるとき、生成の諸瞬間は「その前」と「その後」に分類される。ジンメルはこの「統一的なもの」を、人間については「個」とみなしている。生者において個性は「理念的存続」として現れ、この存続の下に生成の諸瞬間が数珠繋ぎになり、諸瞬間は同一の個体の諸状態として、その内の一つは他の一つの「前」のもの、もしくは「後」のものとなる。つまり個性の「発展諸瞬間 (Entwicklungsmomente)」[Simmel 1916b: 447=1977: 175]として、これらの瞬間は「時間系列」の中に集められ、秩序づけられる。翻って「個」から見れば、「個」は絶対的生成を拒否する「時間系列」の中で、統一的な「生の持続」となる。そしてこの生の中で各瞬間は、全ての過去の瞬間を前提とし、全ての未来に基礎を与え、各々にこの生の全体性が提示されるその都度の形になるのである。以上から生は「個」に即して、自身を「歴史」的存在として形成するのである。

(2) 「生における時間」と「歴史における時間」

「個」により生は自身を「歴史」的存在として形成するのであるが、それではいかにして「歴史における時間」は「生における時間」と何ものか共有しつつ、同時に生における時間とは異なる性質を持つことで、独自の「時間」としての役割を果たすのか。

生における時間は、過去と未来である生が、過去と未来の「境界」としての瞬間へと高まると共に、「瞬間」を越えて過去や未来へと送り返される、一連の「自己超越」の動きであった。同様に歴史の場合も、個は「自己超越」という性格を備えている。個は個々の表出の瞬間が過去や未来によって浸透されており、それゆえに個々の瞬間は内部から越えられて

いる。以上のように歴史はそれが「自己超越」であるという点で、生における時間と「時間」としての性格を共有し、これにより歴史における「時間」なのである。他方で、歴史における時間は、生における時間とは異なる性格の時間形式を持つ。「個」において、第一に過去や未来を「包括」しながら、ある瞬間に直観される。第二に諸瞬間は「区別」され、「その前」と「その後」に分類される。第三に諸瞬間は系列に秩序づけられ、連続的な「経過」⁶⁾となる。「包括」「区別」「経過」といった歴史における時間が持つ性質は、生に一連の自己超越を包括する力を、つまり一連の経過した出来事の持続的な統一を保証する力を付与する。以上から「歴史における時間」は「生における時間」が持つ「自己超越」という性格を受け継ぐと共に、「生における時間」では不明瞭であった「包括」「区別」「経過」といった性格を備える。「歴史における時間」が備える力により、「生における時間」の自己超越の運動は包括され、一連の経過した出来事の持続的な統一がなされるのである。

第5節 歴史学における時間

(1) いかにして出来事は歴史になるか

最後に、ジンメルの歴史認識論での「時間」概念を確認することで、生の現象の全体への見渡しを可能にする「歴史学における時間」を解明する。

後期の歴史認識論「歴史的形成」[Simmel 1917=1976]で、ジンメルは「いかにして出来事は歴史になるか」[Simmel 1917: 323=1976: 180]という歴史学の根本問題を問う。この問いの背景には、対象の時間的な成立過程の条件や段階の模写を歴史学の課題とする経験科学的な歴史学（歴史主義）への批判が含意されている。彼は歴史主義の生の直接性に基づく出来事理解を拒否する。彼によれば、歴史的な出来事の連関は時間的性格を持つ一方で、歴史の内容である出来事の連関は論理的で無時間的な性格を持っており、歴史認識はこの内容の論理的連関が生動態性によって秩序づけられるところに成立するのである。以上から歴史学は生の直接性に基づく出来事の模写によっては基礎づけられず、この基礎づけには「出来事」から「歴史学」を産出する「歴史的形成」の形式が解明される必要がある。彼はこれを生の「体験形式」の「変形」として解明する。歴史家は生において働く体験形式の「変形」によって、出来事に内容の論理的連関を与えると共に内容の連関に生の動態性を与える「歴史的形成」の形式を得るのであり、この形式によって「歴史という構成物(Gebilde)」[Simmel 1917: 323=1976: 180]つまり「歴史学」を産出するのである。

歴史学が内容の動態的な時間的性格と共に論理的で無時間的な性格を持つ以上、「歴史的形成」の形式には独特の時間的性格が付与される。ジンメルが「歴史的形成」の形式として挙げる「意味」「補完」「流れの指向性」「状態」は、いずれも「時間」という性質を持っている。第一に、時間的に離れた内容を結びつける「意味の統一」[Simmel 1917: 330=1976: 188]に基づき、諸内容が一つの概念に従う全体へと総合される。第二に、時間的に離れた切れ切れの断片は、歴史家の「想像力(Phantasie)」⁷⁾[Simmel 1917: 343=1976: 203]に基づく「補完(Ergänzung)」[Simmel 1917: 333=1976: 192]によって、一つの全体へと形成される。第

三に、生の流れの「未来への前向きな指向性 (Gerichtetheit in die Zukunft nach vorwärts)」 [Simmel 1917: 350=1976: 212] が「転換」 [Simmel 1917: 350=1976: 213] されることで、過去と未来との有機的な絡み合いが解消され、過去がそれ自体で個々の断片を全体へと形成する形式となる。第四に、生の諸事実の不連続性を貫いて広がる恒常的な「状態 (Zustand)」 [Simmel 1917: 357=1976: 220] によって、諸出来事は「一つの像」に変わる。以上、「歴史的形成」の形式は、時間という性質を持つ。この歴史学を可能にする時間を、「歴史学における時間」⁸⁾と呼ぶことができる。この「歴史学における時間」を持つ「歴史的形成」の形式によって、出来事に内容上の無時間的な連関が与えられ、同時にこの連関に生の時間的な動態性が与えられることで、歴史学は産出されるのである。

(2) 生の自己認識としての歴史学

だが、なぜ生は「歴史学」という認識形式をさらに必要とするのか。それは個体的な生がそれを乗り越える諸力から成立しているからである。第一に、生それ自体が「世代の系列を貫く連続的な流れ」として自身を「個」として形成することで「境界」を設けると共に、この境界としての「個」を乗り越えていく点にその運動の本質があった。したがって、生の運動は、あらゆる個を乗り越えてどこまでも継続されるのである。第二に、個体的な生はその内容を「環境 (Umwelt)」 [Simmel 1918b: 316=1977: 153] から得て、自らを形作る。環境は内容を貯蔵する諸世界の総体であり、個体的な生はある時はこの世界からある時はあの世界から内容の一片を取ってきて自身を形作りながら、個体的な生自身の「エネルギーの潜在的な可能性」を現実化する。その際、諸世界は個体的な生にそれが通過する諸々の駅を、あるいは貯蔵した諸内容を提供するのであるが、諸世界の内容は各々、その可能的な内容を一度に実現されるのではなく、常にその一部のみが現実化される。その結果、個々の生に与えられるのは、諸世界が持つ可能性の中で現実化した断片の総体からなる端的に現実的な環境なのである。それゆえ個体的な生は絶えず環境との間の「偶然 (Zufällige)」 [Simmel 1918b: 317=1977: 154] の内に置かれており、体験された心的内容の全体は諸々の世界の断片なのである。以上のように個体的な生はそれを乗り越える諸力から成立するため、生にとって「全体」は与えられず、現在の瞬間を生を全体と結びつけることが困難である。そこで生は生の「全体」を見渡すことのできる「歴史という構成物」⁹⁾を産出するのであり、そしてそれにより生は自己を「認識」するのである。

第6節 おわりに

本稿が解明した生、歴史、歴史学という時間の固有の性格は以下の通りである。「生における時間」は境界を持たない境界存在である生の自己超越の運動の意識形態である。「歴史における時間」は諸瞬間に包括、区別、経過を与え、諸瞬間の統一体として歴史を形成する。「歴史学における時間」は出来事を歴史学へと構成し、かくして生は自己を認識する。

さて、以上のジンメルは時間論は「時間の社会学」に対してどのような展望をもたらすだ

ろうか。最後にこの点を考えたい。本稿では、「歴史における時間」では十分ではない生の見渡しが、「歴史学における時間」によって達成されるというジンメルの時間論の基本構造を提示した。この点は「生における時間」についても指摘できる。自己超越の運動の意識形態である「生における時間」は、様々な周期からなる生物学的時間や各社会に独特のリズムや周期性を与える社会の時間を根底で支え、時に攪乱する、質的な生命を基礎づける「創造」や「運命」を開示するだろう。「創造」や「運命」は歴史を形成する個や世界が、自己超越の運動としての生によって内部から越えられるときに生じるものと理解されるのである。そして、この発展、転変し、個体を越えながら個体を通じて広がっていくあり方を、「歴史学における時間」はいわば「人類の精神史」[Simmel 1916b: 450=1977: 179]として繋ぎ止めるのである。ところで、以上のジンメルの時間論は歴史学の基礎づけに止まらず、歴史的である限りの人文社会科学一般の認識論的基礎づけに拡大可能である。その際、歴史的である限りの人文社会科学は、「生における時間」や「歴史における時間」を反映することになる。仮にこの反映がない場合には、人文社会科学は歴史的な性格を失い、おそらくは自然科学の一種となろう。以上から彼の時間論は、精神諸現象を形成する質的なものにおいて人文社会科学を可能にする条件を提示するものと解せる。そして、それゆえに、質的時間と量的時間の区別に鋭敏なジンメルの時間論は、「質的な社会的時間／量的なクロックタイム」¹⁰⁾の区別に立つ「時間の社会学」に探求の条件を提示するだろう。

注

- 1) ジンメルには時間に関する論点が複数存在する。『社会分化論』の社会進化の内在的時間、『貨幣の哲学』や「大都市と精神生活」の時計の時間や生活のリズム、芸術論の芸術作品が表現する時間である。これらの統合の試みとしてスキヤッフ [Scaff 2005] を参照せよ。
- 2) ジンメルのカント理解については、北川 [1985] を参照せよ。北川によると、ジンメルのカント解釈の要点は、カントの認識論が科学という限定された認識形態を基礎とした結果、世界の原理、総体性を問う問いが排除された点への批判にある。ジンメルはこのカントへの批判的解釈から、ゲーテ読解を経て、「生」という立場へと移行するのである。
- 3) 「アンリ・ベルクソン」でのベルクソンの時間に関するジンメルの記述は、『創造的進化』第1章の「持続」節 [Bergson 1907: 1-8=1979: 21-28] に基づいている。またジンメルへのベルクソンからの影響については、ジャンケレヴィッチ [Jankélévitch 1925=1996] を参照せよ。ジャンケレヴィッチは、ベルクソン哲学はジンメルの思考の内発的展開が漠然と描いていた力線を顕在化させる刺激剤であったが、とはいえジンメルの生の哲学は彼自身の道徳的、社会学的、美学的、宗教的相対主義の成熟の結果であるとする。
- 4) 「歴史」と「歴史学」は、原語ではいずれも *Geschichte* である。これは *Geschichte* という語の多義性に起因する。この語はまず①歴史的現実、つまり「出来事」を指す。また②出来事を記述する学、つまり「歴史学」をも指す。そこで「出来事」と「歴史学」との関係が歴史論の課題となる。ジンメルは両者の媒介として、③生の統一形式としての「歴史」

- を探究する。本稿ではこの三つの歴史概念について、①を「出来事 (Geschehen)」と呼び、②出来事を記述する学を「歴史学」、③生の統一形式としての歴史を「歴史」と呼ぶ。
- 5) ジンメルがここで想定しているのは有機体の運動である。彼によれば、生は自己を担う非有機的な物質を絶えず有機的なプロセスに巻き込み、その実体の固有本質を自己の中に、あるいは自己によって解消させる。[Simmel 1916b: 385=1977: 100]
 - 6) ジンメルも先述のベルクソンと同様、個々の状態へ還元できない時間の「経過」という性格を重視する。その一方で、ベルクソンが意識における時間の流れを「宇宙」[Bergson 1907: 11=1979: 32] の無限性と結びつけるのに対して、ジンメルは時間の経過を死が内的に規定する「個」の有限性と結びつける点に相違がある。そしてこの有限性ゆえに、次節で解明する、歴史学という認識形式が問題となるのである。
 - 7) ジンメルは「想像力 (Phantasie)」を「構想力 (Einbildungskraft)」と同義の語として使用している。構想力は、カントによれば、対象が現前していなくてもこの対象を直観において表象する能力である。ジンメルのこの用例の背景には、ゲーテやシュライアマハーによる芸術の構成契機としての想像力の提示、モムゼンが芸術と同様の「想像力」[Mommsen 1885: 5] を歴史学を構成する決定的な力としたことがあると推察される。
 - 8) 「歴史学における時間」がジンメルの思索の変遷に持つ意義については、廳 [2005] を参照せよ。廳によると、前中期の歴史認識論は、模写／構成、客観的／主観的、理論的／感情的の二項的枠組みを持っていたが、これはジンメルが目論む「語られたこと」の「理解」には不自由であった。後期では、無時間的／歴史的という別種の枠により、客観的精神の「事象的理解」として「語られたこと」の「理解」が探求されたのである。
 - 9) 「歴史という構成物」は、「発展 (Entwicklung)」[Simmel 1918a: 176=1976: 91] 概念と関わる。トレルチ [Troeltsch 1922=1988] は、ジンメルが後期の歴史論で「発展」ないし「構造」という歴史学の根本概念を提起した点を評価する。その一方、歴史学が実在から乖離し、論理的諸形式の気ままな遊戯に留まっていると批判する。本稿が解明したジンメルの時間論は、トレルチが批判する学と実在との乖離を埋めるであろう。
 - 10) 「時間の社会学」における「質的な社会的時間／量的なクロックタイム」の区別については、本書第1章『『時間の社会学』のあゆみ』(鳥越信吾)を参照せよ。

文献

ジンメルの著作、論文からの引用については、Georg Simmel Gesamtausgabe. Frankfurt am Main: Suhrkamp を使用した。また訳出に際しては、既存の邦訳書を参考に一部表現を改めたものを記載している。

北川東子 [1985]「カント——ある哲学的伝統——ジンメルのカント解釈」『哲学論叢』16, 173-191.

廳茂 [1995]『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社。

- [2005] 「G・ジンメルにおける『理解』問題——見取図の試案」『ディルタイ研究』16, 30-71.
- Bergson, H. [1907] *L'évolution créatrice*, Paris: Félix Alcan. (真方敬道訳『創造的進化』岩波書店, 1979年.)
- Jalbert, J. E. [2003] “Time, Death, and History in Simmel and Heidegger,” *Human Studies*, 26, 259-283.
- Jankélévitch, V. [1925] «Georg Simmel, philosophe de la vie», *Reveu de métaphysique et de morale*, 32, 2, 213-257; 3, 373-386. (合田正人訳「ゲオルク・ジンメル——生の哲学者」『最初と最後のページ』みすず書房, 363-434, 1996年.)
- Mommsen, T. [1885] *Römische Geschichte*. 8. Buch, Leipzig: Weidmann.
- Scaff, L. A. [2005] “The Mind of the Modernist: Simmel on Time,” *Time & Society*, 14(1), 5-23.
- Simmel, G. [(1904)1918] *Kant: Sechzehn Vorlesungen gehalten an der Berliner Universität*, Vierte, erweiterte Auflage, München und Leipzig: Duncker & Humblot. (木田元訳「カント」『カント カントの物理的単子論』白水社, 9-278, 1976年.)
- [1914] „Henri Bergson“, *Die Guldenkammer*, 4. Jg. (= Heft 9 vom Juni 1914), 511-525, Bremen. (斎藤栄治訳「アンリ・ベルグソン」『芸術哲学』岩波書店, 154-178, 1955年.)
- [1916a] *Das Problem der historischen Zeit*, Berlin: Reuther & Reichard. (= Philosophische Vorträge. Veröffentlicht von der Kantgesellschaft, 12.) (酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳「歴史的時間の問題」『橋と扉』白水社, 228-253, 1976年.)
- [1916b] *Rembrandt: Ein kunstphilosophischer Versuch*, Leipzig: Kurt Wolff. (浅井真男訳『レンブラント』白水社, 1977年.)
- [1917] „Die historische Formung“, *LOGOS. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*, Band 7, 1917/18, Heft 2, 113-152, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck). (土肥美夫・堀田輝明訳「歴史的形成」『断想』白水社, 177-235, 1976年.)
- [1918a] *Vom Wesen des historischen Verstehens*, Berlin: Ernst Siegfried Mittler und Sohn, Königliche Hofbuchhandlung. (=Geschichtliche Abende im Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht, Heft 5.) (酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳「歴史的理解の本質について」『橋と扉』白水社, 61-95, 1976年.)
- [1918b] *Lebensanschauung: Vier metaphysische Kapitel*, München und Leipzig: Duncker & Humblot. (茅野良男訳『生の哲学』白水社, 1977年.)
- Troeltsch, E. [1922] *Die Historismus und seine Probleme*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck). (近藤勝彦訳『歴史主義とその諸問題』ヨルダン社, 1988年.)